

ペーター・スローターダイクの『球体』三部作

バルバラ・フライターク

1 本講演の焦点

本日の「人間性と環境についてのビジョン」というテーマのため、私はあるドイツ人著述家の三部作を選びました。その人は才気にあふれ、また議論の的になることも多いペーター・スローターダイクです。

実際、彼は「才気にあふれています。それは著書『シニカル理性批判』（1983年刊／邦訳・ミネルヴァ書房）を見ればわかります。この書は「知識」と「近代性」の失敗を盾にとつて、「理性のヘゲモニー（主導権）」という理論を崩そうとしたもので、とりわけ20世紀の2

つの世界大戦の原因と結果に焦点を当てています。彼はこの著作や他の研究において、独特で創造的な表現法を用いながら、新しい材料と議論を分析しています。

彼が議論を呼び起こす人物であることは、ドイツのバイエルン州エルマウで（1999年7月に）彼が講演した『「人間園」の規則——ハイデガーの「ヒューマニズム書簡」に対する返書』（書物として1999年刊／邦訳・御茶の水書房）でもわかります。これはハイデガーに「賛成しつつ反対した」主張ですが、スローターダイクは、人間の遺伝子を最適化して「人間性」の形成に一種の干渉をする可能性について議論しました。

彼は、フロイト、ニーチエ、ハイデガーの讚美者・

信奉者であると同時に、フランクフルト学派へある種の支持を示した後、ユルゲン・ハーバーマスを「アドルノ、ホルクハイマー、ベンヤミンの墓を守る夜警員」と呼んで、批判理論の死を宣言しました。その結果、ハーバーマスの『コミュニケーショナル行為の理論』（1981〜83年刊／邦訳・未来社）を支持する人たちとの論争を引き起こしました。支持者の中には、ラインハルト・モーア（週刊誌「シユビーゲル」のジャーナリスト）やトーマス・アツシヨイアー（週刊新聞「ツァイト」でスローターダイクを非難）などがいます。

そういうことから、スローターダイクは、いろんなあだ名や通称をつけられたわけです。「恐るべき子ども」「ドイツの悪魔」（仏紙「ル・モンド」1999年10月）、「矛盾した、単純な、境界破り」（「南ドイツ新聞」1999年10月6日付）のような。彼に与えられたさまざまな形容詞の中でも最も攻撃的なものの一つは、ユルゲン・ハーバーマスの取り巻きの人々から発せられたものです。『ファシスト』とまでは言わないまでも、『右翼』の著

述家、思想家だと非難されたのです。

スローターダイクは新しい著作『球体』三部作（1998、1999、2004年刊／未邦訳）について質問されて、自分の特徴を、インドでしばらく「ゲル（宗教指導者）」たちとともに過ごしたときの自分は「ロマンチックな」人間だとし、また、質の良いワインと飲み物が好きだが、働きすぎることから「不器用なボヘミアン」だと思いました（フェリックス・シュミットによる1999年10月6日付のインタビュー）。このインタビューで、彼は自らを「独学者」と呼びました。なぜなら、模範となるような哲学の師を、これまでに一度ももたなかったからです。

三部作の内容については後ほど述べますが、彼のこの作品で『助産婦』の役割を果たしていると認めています。2千頁以上あり、「気泡」「地球」「泡の集まり」に分かれているこの著作において、彼の関心は出産、つまり生命の誕生に向けられています。この3千頁近くの本で彼は、ハイデガー的な（人間は）世界へと投げ出されている」という表現を、「天空へと投げ出されて

いる」に変化させています。

このように、スローターダイクは哲学を文学や芸術と巧みにブレンドしており、この独創的な点に注目すべきでしょう。

遺伝子工学をめぐる激論

三部作をよりよく理解するために、彼のいくつかの伝記的データや、以前の彼の作品を知ることが意味があると思います。

ペーター・スローターダイクは1947年、マンハイムに生まれ、現在はカールスルーエ造形大学の学長兼教授であり、ウイーン美術アカデミーの教授でもあります。ドイツのテレビ局からまかされた番組『哲学カルテット』を司会し、成功させています。この番組は現代哲学の権威や著名人を招き、高い視聴率を得ています。

ハーバーマスは2009年に80歳を迎えましたが、ある意味で、スローターダイクは、ハーバーマスのネガティブな「もう一人の自分(オルター・エゴ)」といえます。彼は、ハーバーマスに疑問を呈したのみならず、

コミュニケーション的理性の存在と有効性についても疑問符をつけており、対話と論証による真実の探求を信じていません。それゆえに、暴力と戦争に抗する道具としての平和的議論も支持しないのです。

ブラジルでも出版された小論『人間園』の規則(エルマウでの講演をまとめたもの)によって、彼は私たちの間で知られるようになりました(ブラジル・サンパウロの新聞「フォーリャ」インターネット版の別刷りである「カデルノ」特別版と、サンパウロの Estago da Liberdade社から2000年に本書が出版されたので)。彼の批判者や敵対者によれば、スローターダイクはこのエッセイにおいて、完璧な人間を生み出すことを目的とした現代の生命科学技術(クローン技術、体外受精、臓器移植、新生児の特徴の出生前的人為的選択、デザインチャイルド)による人間の遺伝子操作を擁護しています。映画『ガタカ』(アンドリュウ・ニコル監督、1998年)によって見事に予想されたようなことです。

その後の白熱した議論において、スローターダイクは、講演で発表したことは彼の「個人的な見解」とい

うよりも、現代社会で「すでに進行中の出来事」であるということ、批判者たちに納得させることに成功しました。今や現代社会は、バイオメダイカル研究の成果を使って「人間性」に干渉することをためらわないという事実も認めさせたわけです。このようにして彼は、「私たちは、こういう干渉を規制する法令を（理論的・実践的に）探求している」というハーバーマスの考え方に反対するのです。

彼が言うように、それが本当にエルマウ講演で意図したことなのであれば、彼は、大多数の人が気づかないうちにすでに起きている事態について、人類に警告しようとしたことになりました。

著書『シニカル理性批判』（1983年）によって、スローターダイクは、哲学の世界で有名になりました。ドイツのポストモダン思想において大いに有望視される人物の一人となったのです。本作品でスローターダイクは、シニズムを2つの形に区別しています。古代ギリシャ哲学からの「キニズム」と、現代思想の伝統からの「シニズム」です。

「KY」を使って書かれるキニズム (Kyriasmus) は、ディオゲネスをモデル（偶像）としています。大樽の中で裸で生活し、生活必需品も持っていなかった人物です。その学派（キニク学派）は社会的慣習への軽蔑を表明し、世論や当時の公的な道徳に反する行為も恐れず実行しました。ディオゲネスの同時代の信奉者「キニスト」たちは、自然への回帰を求めて、法としかたりに対して過激に抵抗していました。

一方、ドイツ語で「ZY」を使って書かれるシニズム (Zynismus) は、まさに現代的意味合いで語られているところのシニズムです。つまり、この概念が当てはまるのは、他人を挑発することを好み、他人の行為や動機の誠意と価値を疑い、目にするすべてのことについて、皮肉と懐疑主義の表現でコメントする癖のある人たちの態度です。

これら2つの意味の違いは概念的にあいまいで、誤解を招きかねないものであり、実際に招いています。スローターダイクの『シニカル理性批判』の解釈において、まさにそれが起きています。彼自身が、自分で

導入した概念的区別を常に維持できるわけではないのです。

スローターダイクは、戦後ドイツの法と慣習に同意せず、目にするすべてをからかって発言しているように見えます。こういう(ミハイル・バフチンの唱えた)「カーニバル化」と「見せ物化」によって、彼の主張や議論の真剣さと信頼性に、時おり疑問を投げかけられることになるわけです。

2 『球体』三部作の概要

ズーアカンプ出版社は、1998年から2004年にかけて『球体』三部作を出版しました(現在までにフランスとイギリスで翻訳が刊行されています)。この中でスローターダイクは、「気泡…小球体」(第1巻)、「地球…大球体」(第2巻)、「泡の集まり…複数の球体」(第3巻)について述べています。これら3巻は、厳しい批判と熱狂的な称賛を同時に受けました。

三部作でスローターダイクは、位相幾何学的、人類学的、免疫学的、記号学的な見地から、「球体」という

言葉の基本的な概念規定をしようとしています。彼の関心は「現代にふさわしい理論」を作り上げることです。

第1巻「気泡」では、「人間的空間」について描こうとしています(*胎児と母が一体である子宮という球体など)。その空間では、「ライブニッツの言う」「モナド(单子)」ではなく「ダイアド(ペア―対)」が(人間同士の)真の一体性を示しているのです。

第2巻「地球」では、形而上学は内的矛盾によって失敗することが運命づけられているとし、その理由を説明しようとしています。

第3巻「泡の集まり」では、形而上学的でもホリスティック的(全体的)でもないさまざまな観点から、生命は多焦点形式で自己展開する、という理論を支持しています。ここでスローターダイクは(*泡の集まりを視覚化した)「ネットワーク」形式のアプローチを要求しています。これはある意味で、すでに(*ネットワーク社会論を展開した)マニユエル・カステルが『情報時代』三部作でテーマとしたものです。

スローターダイクによれば、「生命」は、同じ場所において、互いに入り組んだ状態で、つながっています。この生命は、「ネットワーク」システムでつながれて、生産され、消耗していくのです。このように著者は、社会学は、「アクター・ネットワーク理論」(*社会の制度や人、技術などが同等の行為者=アクターとして不可分のネットワークをつくっているとする理論)に取って代わられて、忘れられ、放棄されるべきである、と信じています。

著者によると、全3巻は「幾何学的生気論の可能性」と限界を診断する」試みです(第1巻、13頁)。

第1巻では、「球体」という概念の使用について説明しています。「球体」という表現は、「生命」と「球体の形成」と「思考」が実質的には同じことを意味していると示唆しています。タレスによる哲学の起源から、アテネのプラトンのアカデメイアまで、そして、カントからハイデガーとその後継者たちに至るまでの反プラトン主義を経て、哲学は「球体」に向かって動いているのだというのです。



図1 「泡」。ジョン・エヴァレット・ミレーの絵画をG・H・エヴェリーが版画化(1887年)

そのため、全3巻を貫く主張として、こう述べます。「愛の歴史は形の歴史であり、それぞれの連帯が球体を、つまり内部空間を形成するのである」(同書14頁)。

人は「個」よりも「一対」として生きる

第1巻「気泡」を導く隠喩は「石鹼の泡」です(図1参照。同17頁)。続く章では、エビグラフ(題辭)と認識論的部分(空間の親密さ)において、ガストン・バシユールの「空間の詩学」に言及し、銀河系の球体から母親の子宮(*子宮という球体)まで分析しています。

その「自由な」発想とイメージの結びつきは、時には、著者が薬物で幻覚を起こしているのではないかと読者に思わせるほどです。ただし、その表現は明晰であり、かつ詩的です（間主観的な理性的議論の範囲内で）。そして、その結論は驚くべきものです！

第1巻の4章「母親の子宮への退行」で、彼は「婦人科学の陰画」を展開しているかのようです（275頁）。そこでは天体軌道や卵の起源（ヒエロニムス・ボスの絵『快楽の園』を分析しつつ。333頁）、胎盤の機能、異なる文化をもつインディオたちの象徴的儀式での胎盤の利用などについて、長文を割いて分析しています。さらに、それらの省察により、天使についての理論、先コロンブス期アメリカでの「ドッベルゲンガー」（自分と生き写しの人）の絵画の出現（431頁）、双子の存在について考察します。なぜなら、彼の基本的な主張のひとつは、「モナド（個）」（ライプニッツの主張）としてではなく、「ダイアド（ペア）」として生きているということだからです。第1巻を終えるにあたり、彼は（『シニカル理性批判』において始められた）フロイトに

対する批判を継続し、ラカンの見解の誤りを指摘しています。

「民族的球体（空間）」から「地球的球体」へ「地球」と題した第2巻では、プロローグとして、紀元1世紀のモザイクに関する美しい分析が掲げられています（図2）。「トッレ・アヌンツィアータの哲学者たち」というモザイクで、7人の老賢者が、ギリシヤの



図2 「トッレ・アヌンツィアータの哲学者たち」（1世紀）。ポンペイのトッレ・アヌンツィアータ遺跡で発見された（ナポリ考古学博物館所蔵）

ある都市（アクロコリントスカアテネ）近郊の牧歌的な風景の中で、ある球体——何かの神聖な像——の周りに座っています。それはパルメニデスとエンペドクレスの全体性と完全性の象徴です。小さな壇と小箱が祭壇の役目を果たしています。地球から至上命令（定言的命令）が発せられているかのようにです。「私のことを考えよ！」と（第2巻21頁）。集まっている哲学者たちの頭上に日時計が掲げられています。オットー・ブレンデル

は、このモザイクを「学校」と解釈したいと提案しました（1936年）。そこでは、これらの哲学者たちは「最初の哲学者」とされる「ミレトスのタレス」の周りに集っています（7頁の脚注、第2巻30〜31頁参照）。7人は知恵と知識を含む7つの等級、7つの質問と解答を象徴しているのでしょうか。

第2巻の序文で、スローターダイクはゲーテの夏の別荘の近くにあるワイマールの公園に、（1777年の）地球を示す「幸運の祭壇」という作品があることを思い出させています（43頁）。球体Ⅱ地球の分析は、さらにニューヨークのロックフェラーセンター入口で巨人

アトラスが担いでいる地球（リー・ロウリー作、1937年）へと続きます。

都市社会学者として、私は特に、第2巻3章「箱、都市の城壁、宇宙の限界、免疫学のシステム」（159〜197頁）に関心をもちます。この章でスローターダイクは、かつてパリにあった「イノサン墓地」（「無垢なる者たち」の共同墓地）の版画を挿入しています。この複製には1550年という日付がついています。この文脈でスローターダイクは次のように述べます。「生命の一形態における精神的尊厳とは、球体を作る力、つまり儀式的共同体の生者も死者も同一領域に集める能力にあるとするならば、小さな部族であっても、何百万もの人々を支配する帝国と同じだけの敬意に値するはずだ」（第2巻、173頁）。

それは、何世代にもわたる形成過程を通して、またまってきたグループです。彼らは自らの精神的な力で、遠近の環を、すなわち慣れ親しんだものと未知のものとの象徴的な環を生み出すのです。これを私たちは「人類学の場所」と呼ぶことができます。人間が本当に落

ち着くのは、この環の内側なのです。その言葉が強く意味するのは、この場所は、生命の世界——死者と生者の想像力とに満ちた球体に結びつけられてきたということなのです。スローターダイクは、死者と生者を包含する生命の世界を創造する努力を「民族的球体」と名づけ、民族の壁を越えた「地球的球体」の時代へと導こうとしています。この文脈においてスローターダイクは、言語の異なる4つの版で伝えられているパビロニアの「ギルガメシユ叙事詩」に言及しています（同書175頁。「アルベルト・シヨット訳、ヴォルフラム・フォン・ゾーデン校正・解説、シュトゥットガルト、1958年刊」の版に言及）。

生と死を主題とする詩や哲学的考察を創造できた基盤が、ここにあるのです。精神的生命を描いた壮大な宇宙的詩劇であるダンテの『神曲』のように――。

生命を生成し維持する3種の「島」

第3巻の中心的な内容は、カプセルと島、温室についての理論です（309～490頁）。本日私たちが議論している全体テーマ（*宇宙と自然・環境のビジョン）に関し

て特に興味深いのは、著者が使う「分離 (Insulmenen)」という概念であり、これは島の形成過程を述べています。この理論には中心的な3種の島があります。「完全な島 (宇宙ステーション)」と「大気の島 (バイオスフィア 2)」 「人類発生の島 (人間生命の発生体)」です。島理論について理解するためには、3種のそれぞれの特性と機能をよく知っておくほうがよいでしょう。

「完全な島」の例として、著者は、すでに存在し、作られ続けている潜水艦と宇宙ステーションに言及します。これら完全な島は、2つの点で地理的な島とは異なります。すなわち「2次元 (平面) に制限されずに動ける」ことと「海洋や河川によって境界が定められていない」ことです。この意味で、地球上の島は「完全な島」ではないのです。なぜなら、移動しないし、局地性があるからです。

著者にとつて、「完全な島」の最も決定的な例は、ジュール・ヴェルヌ描くところのネモ船長によって示されました。船長は、潜水艦に「動中の動 (mobilitas in mobilitate)」 (*ノーチラス号の船内に掲げられたラテン語の銘句。「動く

ことで変化をもたらす」という特性を与えましたが、この概念は、この後すぐ、オスヴァルト・シュペングラーが、私たちの「ファウスト的な」文明における実業家たちの生の在り方を特徴づけるために用いました。これは、今の文明が発展させた洗練された技術から生じたものです。

「偉大な厭世家（*ネモ船長）の発明精神が生んだ電動ホテル潜水艦・ノーチラス号は、『島であること』という絶対的な考えを、初めて完璧な技術で形象化した。それは完全な孤立と内省の世界モデルである（楽器と機関誌と充実した図書館を備えている）。空気調節がなされ、群衆と船たちから常に離れつつ海面下を行く孤絶の空間である」（第3巻、318頁）。それはまるで、無人島でのロビンソン・クルーソーの不本意な難破を「望まれた亡命」に変え、モデルの島をヨーロッパ文化の宝物で一杯の「浮走する洞窟」に、そしてロビンソンを気難しい「海の世捨て人」に変えてしまったかのようです。

スローターダイクが挙げる、さらに意味深い例は宇

宙ステーションです。これは哲学にとって、新たに「人間の条件（conditio humana）」を明らかにする理論を展開するのに役立ちます。宇宙征服のロマンはさておき、宇宙船や、乗組員のいる宇宙ステーションの現実、人間が宇宙に存在するための不可欠の条件である3つのカテゴリーに現れます。「内在性」「揚力（上昇力）」です。

人が乗り込んだ宇宙ステーションは、人類学にとつての実験フィールドであり、「宇宙ステーション内部に存在する」ことでしか「宇宙飛行士として存在する」ことはできないことを示します。著者は言います。「この関係の存在論的特殊性は、宇宙ステーションは世界のモデルであるという事実に基づく。もっとくわしく言えば、宇宙ステーションは『内在性』の機械であり、そこでは『存在または世界に存在し続ける可能性は、技術の世界を司る者に完全に依存している』ということとを、現実の島よりもはるかによく表しているのである。この『船内の哲学』は、ハイデガーの『ゲシュテール（組み立て／立ち上げ）』（*テクノロジーの本質ならびに世

界の構造を表現しようとした用語」の理論をポジティブに再解釈したのと言えらるう」（第3巻、321頁）。

宇宙ステーションは、単なる風景や場所ではないと著者は主張します。ほかでもない、そこには宇宙飛行士だけが集い、彼らは体内に微生物をもっている（*）がたつて食べ、生きていかねばならない）からです。しかし将来、ミール宇宙ステーションがより小さなユニットに変わったならば、N A S Aは何らかのミニ温室を試すことでしょう。ここでは4人の乗組員のために、太陽エネルギーによって、2・8平方メートルの小さな菜園（サラダ・マシシ）でニンジンやキュウリ、レタスが栽培されるでしょう。こうして、宇宙ステーションは、もうひとつの「環境」であると解釈できるのです。それは宇宙を克服した技術者たちによって、生命維持のシステムと描写されています。つまりE C L S S (Environmental Control and Life Support System / 環境制御・生命維持システム) です。

この角度から見ると、人間中心の観点から生まれた現在の「自然」概念の再検討が必要になります。この

新しい観点、すなわち自然とは人間生存のための一種の「補助装置」であるという見方からすれば、地球という環境で人間がもともと見出した「自然」は「人間の生命保護のため、あらかじめつくられていたシステム」と定義し直すことができます。この地球というシステムを捨て去った人だけが、外部からそれを見て、このことを理解するようになるのです。その結果、これまで知っていたことや慣れていたことから離れて、（人工）生命の新しい探求が始まります。

スローターダイクによれば、これは、新しい人工環境における「人間の条件」をよりよく理解し意識するうえで、宇宙探査によつてもたらした偉大な貢献なのです。

こうした「もの見方の大変革」を理解すれば、島理論の第2の島「大気の島」をより楽に理解できます。ここではセントラルヒーティングと空調は、当たり前前のサポートです。どちらも、家や事務所の内部環境、そして私たちが歩き回っている店やショッピングモール、つまり「空気調節された大きな船」という消費と

商品の世界へと心を向けさせます。そこから、空調された菜園や公園、植物園の温室までは、ほんの一步にすぎません。

ここでスローターダイクは、時間を少しさかのぼり、次のトピックにおいて、人工的な温室の発生とそこで栽培について書いています。ロンドンの水晶宮（1851年／＊第1回万国博覧会会場）、ブリュッセルの近くに建設されたラーケン公園（1875年／＊ベルギー王宮であるラーケン宮に隣接。園内に1900年のパリ万博の日本館や中国館などもある）、ハンブルクやハノーファー、ミュンヘン、ベルリンの植物園、真冬のヨーロッパでオオニバスのような熱帯種を栽培するためのその他の温室などです。

スローターダイクによって分析された他の「大気の島」には、アメリカによって1991年から行われたアリゾナの巨大プロジェクト「バイオスフィア（Biosphere）2」（第2の生物圏）のような実験があります（＊アリゾナ州に造られた巨大な人工生態系。「バイオスフィア1」すなわち地球環境そのものに対して「2」という）。

「温室での植物の実験を、人間の乗組員を含むプロジェクトに拡大する」というアイディアに魅了された石油大富豪のエドワード・バス氏が資金提供しました。覚えている方もいらっしゃると思いますが、ユネスコが出版したある本の中で、ジャン・ボードリヤールがこのプロジェクトについて「それは芸術色の強い『隔離し包含する実験』であり、1500万ドルが費やされた。しかしながら、その結果はあまり励みになるようなものではなかった」と言っています（「人、街、自然」、1992年）。批評家たちは、それがサイエンス・フィクションを本物の科学と混同してしまった巨大プロジェクトであったとほのめかしました。ある意味で、スピルバーグのSF映画『ジュラシック・パーク』シリーズ三部作をこのジャンルに分類できるかもしれません。

1991年の「バイオスフィア2」モデルの誤りを正そうとして、その10年後（2001年）、コロンビア大学が「エデン・プロジェクト」を始めました。「エデン・プロジェクト」の外観は、この三部作の最終巻の内容

を非常によく象徴しています。「泡の集まり」の形なのです(図3)。

ようやく第3の島々人類発生の島々にたどり着きま



図3 「エデン・プロジェクト (Eden Project)」。バイオーム (Biome) と呼ばれるドーム型植物園など人工的に自然環境を作り出した巨大な複合施設。英国コーンウォール州にある

した。それは十分に隔離された状況における、人間のオートポイエーシス (autopoiesis) (自己生成) による発生を特徴づけています (すでにニクラス・ルーマンやF・J・ヴァレラ、その他の学者が言及していますが)。スローターダイクはこれを Selbstirgung (自己増殖) と名づけ、生命なかならずく人間 (ホモ・サピエンス) の生命が自己生成し育っていくやり方としています。

この講演とこのシンポジウムの全体テーマのために、きょうは、人類のオートポイエーシスのさまざまな段階について列挙するだけにいたします。

この第3の島を、スローターダイクは9つに分類しました。それらは人間の生命の前提条件に関係する空間であり次元です。Chirotop ; Phonotop ; Uterotop ; Thernotop ; Erotop ; Ergotop ; Alethotop ; Thanatotop ; Nomotop です。特徴を簡単に見ていきます。

Chirotop 人間の手が働く空間のことで、手が届く範囲の世界です。投げる、たたく、切るといった最初の基本的な人間の操作によって、特定の結果を及ぼせる環境です。

Phonotop (または Logotop) || 人の声の届く範囲です。聴覚空間もここに入ります。ここでは共同体の人々が互いの話を聞き、会話し、指示し、影響を及ぼし合います。

Uerotop (または Hysterotop) || 母性的な保護と生命の世話(ケア)の領域を広げることを目的として獲得された空間です。この空間が生み出す求心力は、愛されているという体験、そして帰属しているという体験として(多くの人々にとっても)感じられます。

Thermotop || 集団を統合させる温かさを意味します。それはもともと家庭の火に由来するものであり、この温かさと家庭生活の甘みのおかげで、すべての幸福感の母体となります。

Ergoto (または Phalotop) || 父権的権威や宗教的権威によってもたらされる *sensus communis* (共通感覚/共同体感覚) の大きさに関わっています。それは協力精神を生み出して、さまざまな仕事を分担させ、究極の場合には、共同体を守るための戦闘や戦争に勇んで参加する覚悟をもたらします。

Aethiotop (または Memotop) || 知識をもつグループが、共同体の経験・伝統の守護者のような状況にいます。彼らは、そのような状態を真理が集まる場所として維持していきますが、その維持のために、虚偽に陥る危険ももっています。

Thanatotop (または Theotop あるいは Ikonotop) || 集団の先祖や死者、精霊、神々について啓示する空間です。「向こうの世界」から送られてくる意味深長な知らせの真意を読み取る記号的なキーボード (*clavatura*) を集団に提供します。

Nomotop || 集団のいくつかの生活伝統を結びつけるものです。その結合は仕事を分業し、互いを当てにすることで行われますが、それによる交換と協力は、相互の信頼や対立、抵抗などの新しい社会構造をもたらすことになるでしょう。ここから法(憲法)の制定にながっていくのです。

原著では、これらのひとつひとつについて、更に議論され深められていますが、今ここでは、これ以上に展開するゆとりはありません。

3 暫定的な結論

これまで述べてきたことから、『シニカル理性批判』の哲学者スローターダイクは、ハイデガーとニーチェを受け継いでいることに気づかれるでしょう。本当の「現代にふさわしい理論」に到達するため、彼は『球体』三部作において、ハイデガー的な「世界へと投げ出されている」を「宇宙へと投げ出されている」を「宇宙へと投げ出されている」へ、またニーチェ的な「悦ばしき知識」を科学の「軽率さ」と「軽さ」に変化させています（第3巻で）。

彼の著作を注意深く読むと、彼は「普遍的な歴史」を再構築するという野心をもって、カール・マルクスやジークムント・フロイト（フロイトの「エスのあつたところ」に自我が生まれねばならない」が何度も言い換えられています）、ヴァルター・ベンヤミン、ニクラス・ルーマン、ゲオルク・ジンメル、マックス・ウェーバー、ハンナ・アーレントその他、多くの著者に助けを求めていることがわかります。

先端技術の応用——専門家を監視せよ

スローターダイクにとって、技術は、とくに生物学的探究と宇宙征服の実現（地球からの離脱）という分野において、現代性²に向けての真の変化を意味するものです。現代の技術は、人間を宇宙船や宇宙ステーションに乗せて、地球の外、宇宙へと放ち、未知なる宇宙へ開かれた完全に人工的な「新しい環境」を創造します。この技術はメディアやマスコミ、電話、無線、テレビ、インターネットその他に支えられています。ハイデガーの問題は、まさに、このために変化したのです。人は「世界へと投げ出される」のではなく「宇宙へと投げ出される」のです。そして、このようにして直面する銀河や宇宙の新しい秩序について、私たちは何も、もしくはほとんど何も知らないのです。

こうした（新しい）事実、あるいは間違つて評価された事実は、社会や価値システム、生命についての私たちの知識のすべてを、そして環境やバイオテクノロジーへの考えのすべてを内側から破壊することでしょう。

スローターダイクの膨大な著作と、『人間園』の規則』についての彼の議論を読んで、彼は次のように読者を説得しようとしているのだと私は解釈しています。

「他者のゲノムを解読するという進行中の事態について、これを公共の問題とし、情報公開させなければならぬ。これらの進行とその結果を、専門家や生物学者、技術者たちにまかせてはならない。彼らは大衆を操作しつつ、事態を進めているのであり、大衆は無知と無関心のまま、何が起きているのかわからず、文字通り『部外者』となっている。だから、事態を動かしているのはだれなのかを明らかにし、技術革新を進める者たちを監視する必要があるのだ」と。彼は警告します。私たちが手をこまぬいて議論している間に、「現実」は進展し、私たちがコントロールできないところへ行っているからです。

『球体』三部作において、スローターダイクはたくさん人の画像や芸術、博物的知識、文学批評や歴史を使っています。彼は、世界の哲学と文学の深い知識をもっており、それらをばらばらに、ダイズムの的に、皮相

的に、しかし首尾一貫した形で利用しているのです。彼は非常に巧みに書きますが、秩序だつてはいません。目的地に到達しようとして、回り道へと迷いこみます。

三部作の最後の章は「撞着語法」(*「賢い愚者」「ゆっくり急げ」のように、矛盾していると考えられる表現をつなげる語法)と名づけられており、三部作の仮想の読者と仮想の作家ら4人を登場させて、懐疑的で見下した様子で語らせています。4人は世界史学者、文芸批評家、神学者、文学者です。各人がこの著書の一部について議論し、評価を下します。しかし、誰も、全3巻に書き並べられたことに同意しないのです。それはまるで、スローターダイクが、3千頁近くもある自身の最重要の著書で述べたことさらに責任を負っていないかのようです。

文学的には、彼はヘルダーリンやゲーテ、ハイデガー、ニーチェの子孫です。だから彼はドイツ語の達人であり、自在な手腕で、文章の一部を破壊しては再度つなげ、ひとつのモザイク画を描いてみせるのです。彼の文章はダイズム的なコラージュであり、しばし

ば相反するイメージを「夢の論理」すなわち連想によって並べています。『球体』第1巻の序論では(35頁)、神によって土で作られた人間の起源について読むことができます。人間は土でできた器にすぎませんが、その器は創造主の栄光の息の一吹きを受け取るものなのです。

彼の著作を読み終えると、だれもが何世紀もの時間と幾つもの大陸の上を飛んできたような感じがするでしょう。時間は限りがないようであり、空間は無限の宇宙へと開かれています。

そして読者は考えつつ、「気泡と地球、泡たち」が破裂し蒸発することを恐れ、そして自問するのです。著者は、こんなにも多くの材料を読んで、それを「非系統的に」並べて私たちに見せてくれるが、それはいったい何のためなのだろうか。その答えは、最終巻である第3巻(泡の集まり)の締めくくりの事実にあるように思います。

つまり、三部作の最後で、先述した4人の対話者を登場させた時、スローターダイク自身が自問するので

す。「すべては夢まぼろしであり、実りなき努力であり、つまりは空騒ぎにすぎなかったのではないだろうか」と! 現代哲学とは、そういうものなのでしょうか?

基本文献

- Peter Sloterdijk: *Sphären I Blasen*, Frankfurt/M. Suhrkampverlag
1998 (644 págs)
Peter Sloterdijk: *Sphären II Globen*, Frankfurt/M. Suhrkampverlag
1999 (1013 págs)
Peter Sloterdijk: *Sphären III Schäume*, Frankfurt/M. Suhrkampverlag
2004 (916 págs)
Peter Sloterdijk: *Regras para o Parque Humano*. Uma resposta à carta de Heidegger sobre o Humanismo., S. Paulo: Estação da Liberdade, 2000 (63 págs)
Peter Sloterdijk: *Kritik der Zynischen Vernunft*, Frankfurt/M. Suhrkampverlag, 1983 (2 vols. Juntos 961 páginas)

※邦訳に際して小見出しを入れた。訳注は(*)によって示した。

(Barbara Freitag / ブラジリア大学名誉教授)